

令和7年度第2回乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会 議事要旨

1 開催日時

令和7年12月25日（木） 15時30分～17時

2 開催場所

広島市役所本庁舎14階 第7会議室

3 出席者等

(1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者

朝倉 淳【座長】	(広島大学 名誉教授)
渡邊 英則	(認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長)
清川 里佳 ※1	(広島市私立幼稚園協会 理事長)
伊藤 唯道 ※2	(広島市私立保育協会 副理事長)
宮地 明美	(広島市保育園長会 会長)
木村 みゆき	(広島市立幼稚園長会 会長)
築地 陽子	(広島市小学校長会 副会長)

※1 堂山 宗敬 様 (広島市私立幼稚園協会 副理事長) 欠席のため代理の出席

※2 福島 ニール 圭治 様 (広島市私立保育協会 理事長) 欠席のため代理の出席

※3 徳永 隆治様 (安田女子大学教育学部児童教育学科 教授) 欠席

(2) 事務局 (広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局)

幼保企画課幼保連携推進担当課長、幼保企画課保育園運営指導担当課長、
教育企画課長、指導第一課長、特別支援教育課長、教育センター次長

4 議題(公開)

今後の架け橋プログラムの取組等について

5 傍聴人の人数

なし

6 懇談会資料名

- ・次第
- ・懇談会名簿
- ・配席図
- ・資料1：令和7年度第1回乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会でいただいた御意見
- ・資料2：広島市が目指すこどもの姿と各種計画体系図
- ・参考資料1：各区における幼保小接続に関する研修会についてのアンケート結果
- ・参考資料2：文部科学省資料「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」

7 出席者の発言要旨

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※ ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

本市の「幼保小の架け橋プログラム」の取組の状況等の実態把握について

- アンケートの質問 1、2 の結果から、令和 5、6 年度及び 7 年度の研修会の結果について 90% 以上の参加者が研修を好意的に捉えているように見えます。研修の内容が何かを知りたいところですが、その内容は「架け橋プログラム」の取組の推進や相互理解において必要なものと理解できます。

アンケートの質問 3 の結果から、取組の実践例は、毎年度、授業・行事等を通して職員同士・こども同士の交流及び意見交換が多く、「架け橋期」の取組は実体的な活動が中心になっているといえるのではないのでしょうか。その背景となる理論研修は幼保や小学校の各々で取り組んでいる場合が多いということでしょうか。こどもに最も効果的な取組として実体的な活動が望ましいと考えられると共に、多忙な各職場の実態から考えると研修は各職場で各々に進めるということによいのではないかと思います。（頂いたコメントを紹介）

- 実態把握については、市立小学校を中心に保育園や私立園も参加している幼保小連携推進委員会がある。そこで、年度の方向性やまとめの報告等をすれば経年比較ができるのではないかと。また、自園で公開実践をした際に、小学校、保育園、私立幼稚園、認定こども園から参加があり意見をいただいた。同じような悩みがあり、実態等について直接、感じることができるが、全体として把握するためには、幼保小連携推進委員会を利用したらよいのではないかと思います。研修会、公開研究会の意見とは別に、年間を通した取組をまとめると、変化が分かってくるのではないかと。

- 幼保小連携推進委員のまとめは活用できると思うが、先ほど、県が行うアンケート等について話があったが詳しく、聞かせて欲しい。

- 届いたばかりのため、詳しい内容をはっきりと把握できていないが、広島市を含む県内の保育園、幼稚園等の幼児教育施設、小学校を対象として悉皆で調査すると聞いている。園と小学校とはアンケートの内容が異なり、園側は 48 問とボリュームのある設問のアンケートとなっている。

また、園を通じて、保護者等の関係者にもアンケートを実施すると聞いており、かなり規模の大きいアンケートになるため、市としてもこのようなデータを活用できればと考えている。アンケートは、広島市を含む、広島県内全ての園・小学校を対象とした調査となる。（幼保企画課幼保連携推進担当課長）

- 資料のアンケート結果については、全ての項目が出されているわけではないと思うが、どちらかというと、「何かやりましたか」ということがメインとなっている。園や小学校が難しく感じていること、できていないこと、その理由について尋ねるアンケートとなるとよい。その辺がないと、次にすることにつながらない。教育課程を編成し、実施した交流等に関して言えば、会議で一緒に作成し、互いに「了承しました」となっているが、本当に一緒に話して作成しているのだろうか。難しさを感じ、いつするのかということもあるだろう。もう少し本質的な問いがあればよいと思う。

- 資料でアンケート結果について全ての結果を提示しているわけではない。現アンケートでは、具体的な課題をつかむような設問がないため、実情を把握できるようなアンケートを今後、検討していきたい。（幼保企画課幼保連携推進担当課長）

- 実態を把握するというのは大事なことだと思う。その時に、肯定的な声は出てくるが、

そうでない難しさの部分はこちらが留意しないと中々見えてこない。成果が上がっていると思うが、そのことにも気を留めていきたい。

- 架け橋プログラムの実態について公立保育園に聞いたところ、園で育んだ力を小学校でどのようにつなげているのかについて意見交換を行ったり、カリキュラムやアプローチカリキュラムの見直しを近隣の園と一緒にしたりしていた。また、学校のスタートカリキュラムと園のアプローチカリキュラムを交換し、検討したことを反映しているところもあり、随分、取組が進んできたと思う。一方、連絡会以外は連携を取りにくい、カリキュラムは日程の確認のみで終わってしまうなどのところもあり、取組に差が出ている実態もある。
- アンケートでは、私立幼稚園は全市で87園うち参加者17園の回答となっている。小学校も57校の回答であり、市内の学校数からいくと、これを全ての実態として捉えてよいのかと疑問に思う。連携が進んでいるところはよいが、公立幼稚園がない地域の小学校と私立幼稚園がなかなかつながり難い実態もある。連携がとても進んでいる所は確かにこういう取組がきちんと出されているが、そこに置き去りとなっている園は、どのように進めてよいか分からず、相談することもできないと聞く。これが全てではないという中で議論しないと、とても差が出てしまうという懸念がある。
- 小学校で連携推進委員会は、小学校区内にある園とする。先ほど言われたように、学区外の幼稚園・保育園からもこどもが入学するため、その園との連携の難しさを感じている。小学校区にある園とは、連携推進委員会で情報交換し、それぞれの取組がどうつながっているのか、どういう課題があるのかについて、かなり検討が進んでいると思う。
- 学校と園との出入り、関係が小さくまとまっていたり、複雑になっていたり、いろいろなところが分かる。
- 連携推進委員会に参加する園と連携が進んでいるが、小学校に実際に入学することの出身園との情報交換が難しいということはないのか。
- 引継ぎ等は必ずどの園ともしている。
- 園と小学校が互いに架け橋のことをきちんと分かってない、知らないというのが一般的だろう。特に、私立幼稚園が出てこないのは、横浜も同じだが、何をやるかを分かっておらず、「何かしなきゃいけない」、「文部科学省や市役所が言うからしなくてはいけない」となっているのではないだろうか。そうではなく、こどもが地域で生活し、園に通い、小学校に生活圏を広げていく中で、段差をつくるのではなく、地域でこどもが育ち合っていくことが架け橋の取り組みだと思う。
昨日行われた架け橋シンポジウムで発表した長束小学校区は、1年ぐらい取り組む中で変わってきたのではないだろうか。公立園、私立園、小学校が互いを知る中で、「こうやってこどものことを考えていくんだ」、「本当にこどもにとって素敵なことなんだ」ということがもう少し知れるとよい。「指導計画をどうするか」、「交流等何をするか」ではなく、「小学校でこんなに元気にやっています」、「小学校で元気がなくなっています」、「園では生き生きしていたのに、学校に行ったら自分を出せなくなっています」などについて互いにちゃんと話し合い、「なぜだろう」、「もう少し、こんな感じに変えたら違うかな」等、率直に語り合えるとよい。架け橋プログラムを作ると、何かをやりまし

って話だけになる。「そのことが本当にどうだったのか」とこどもの姿をもとにもう一度話し合えるとよい。「こどもにとってどうか」という視点を考えるのは、架け橋プログラムの一番大事なところ。互いのよいところについて知り、互いに自分たちは何ができるかを考え合うことを各地区でできるとよい。そういうものをどのようにつくっていくのかが大事であり、好事例も必要だろう。ただし、好事例で、特定の先生や校長先生、園長先生が頑張っている地域は、その先生がいなくなると消えてしまう可能性がある。そういうところについて、このような会議で、どのような枠組みで、どのようなやり方をすれば、持続可能な形で地域に根づいていくか、考えていこうという形になっていく。

これは広島市だけの話ではなく、どこの地域でも同じである。「こどもにとって」をきちんと話し合うことは、小学校だろうと、中学校だろうと、保護者にとっても大事なこと。こどもも先生も保育・教育が楽しく、こどもがこうやって成長していくことを支えていく。保育の魅力、小学校以上の教育の魅力、こどもが育っていくのが面白いということと言えなくなると、どちらが大変だ、やらなきゃいけない仕事が増えた、他のことが忙しい等という話だけになる。こどもが育つことが楽しいと理解されなければ、教師・保育者も増えないし、社会に対して幼児教育、小学校教育の面白さとか、重要性も伝わらない。そもそも、こどもが地域で育っていくことをみんなで応援できる形になっていかない。このようなことを改めて考える場が架け橋であり、乳幼児教育保育の質の向上、指導向上だということがきちんと各園、小学校に伝わっていくとよい。

昨日の「架け橋シンポジウム」に小学校の先生、校長先生が参加したことは、結構、大事だ。幼保小接続は下のほうに見られてしまいがちで、文部科学省の架け橋プログラムのモデル地区の調査にもそのように表れている。小学校で大変なこどもの問題は、幼保小の中で解決できることが結構あり、架け橋プログラムに取り組むことで授業も変わっていきますよということを伝えていくとよい。

- 市内の全ての園、校の実態を詳細に把握できてない。取組が進んでいる所とそうでない所があり、取組が進んでないところについては、どうしたらいいのか分からないなどの実態がある。教職員の意識の問題もあると思うが、日々、忙しく業務をしてる中で、新たな仕事と思われないう、「こどものため」という目的をもって連携できるよう、事務局としても気をつけて周知していきたい。また、御意見のとおり、設問も工夫していきたい。（幼保企画課幼保連携推進担当課長）
- 私たちが考えている部分は新たに付け加わる、余分なことではない。考え方や取組は、教育・保育の本質のところに関する部分であり、そのことに発想を得たり、取り組んだりすることは、その部分だけではなく、全体にも肯定的な影響が及ぼすものと捉えている。大事なことであり、そこを実現していくような取組となり、実態を捉えていく必要もあるかもしれない。
- 今年から「架け橋シンポジウム」を行ったことがすごい。教育委員会とこども未来局が手を組んでることが伝わってきて、それもすごい。行政も試行錯誤だと思うが、大事だということをどのように伝えていくか。工夫することは各園と小学校側にあると思うが、園と小学校だけでやれとなると、校長、園長、担当する教員が転勤等で変わると消えてしまう。どうすると広島市全体でよくなっていくのか、皆さんが試行錯誤をし、今のやっていこうとする雰囲気の高まりを盛り上げていけるとよい。シンポジストの先生も、一生懸命話してくれて嬉しかった。自分たちがやっていることを自分たちで話そうという場ができたことが素敵だ。

本市の架け橋プログラムの目指す方向性等について

- 幼少期から児童期への保育・教育の連携は、次期学習指導要領改訂においても一層重視されることになると考えられます。例えば、学習指導要領改訂に向けた体育科のワーキンググループでは、小学校～高校の系統的指導の検討の中で、小学校１年～４年の学習内容を「運動遊び」という概念で捉える案が示され議論されています。幼児期と小学校の段差を小さくすることは、現行の学習指導要領において体育科の学習内容を小学校２年まで「運動遊び」とし、幼児期の「健康」領域における「運動遊び」との連携を強めているところです。それをさらに小学校４年まで繰り上げようという案が検討されているわけです。

これは体育科に限った話ではなく、小学校教育全般にわたる潮流と考えられ、「幼保小の架け橋プログラム」の実施はこれからの教育・保育において益々重要視されることになると考えられます。

幼児教育・保育の専門性と小学校教育の専門性は、言うまでもなく共通した部分がありますが、一方では各々の専門性があると思います。なくてはならないと思うのです。その点で幼稚園等の教員・保育士、又は小学校教員としてそれぞれの資質・能力の向上が求められ、スキルアップの研修が不可欠と言えます。「架け橋プログラム」を実施するために幼稚園等の教員・保育士及び小学校教員の専門性・独自性を高めることと、そのうえでの各々の役割を果たす協同性を高めていくことが重要ではないかと考えます。

そのことを前提に、幼保小の架け橋プログラムを実施するためには、幼保教員・保育士が小学校教育の実情を概観すること、小学校教員が幼保の実情を概観することによってこどもや指導・保育活動の実情を捉えることが不可欠と考えます。各々の立場の研修を充実させたうえで相互に実情を知る研修が必要であり、研修の機会とその内容の吟味が課題になるように思います。（頂いたコメントを紹介）

- 学習指導要領の改訂に伴い、生活科や総合的学習の時間がどのようになっていくのかについて伺いたい。

- ワーキングのメンバーではないため、資料や報道を通して知っている内容となる。これまで大切にしていきたことは引き続き大切にす方向性となる。特に、この会議の関連でいえば、円滑な接続については、引き続き大切にされる。或いは、大切にしなければならないという流れとなる。

一方、危惧していることが何点かある。まず、生活科の授業や学習指導の実態は、ここで話し合われたこととよく似た状況がある。自身の周りは、生活科が大好きな人、大事だと思う人、一生懸命頑張ってる人がいるが、これが全てかということそうではない。必ずしも近くではなく、広いところにもいろいろな生活科があり、教師の困り感やこどもの困り感が存在することも実態である。その部分も含めて、評価がよくなっていくことが大事。そこにどのように考え方や方法を届けていくか、一緒にやっていくか、ということが生活科の課題、接続の課題でもあるだろう。

もう一点、関係が深いことは、情報の扱い。情報活用能力が言われているが、情報活用能力が情報技術と活用能力を中心に語られている。それは社会全体や、小学校の中学年以降のことでもあるが、そこへの意識が大事である。それが本当に機能するためには、小学校で諸感覚を使いながら体験し、そこで問題解決をしたり、何か目的を実現したりするベースがあり、或いは、幼児期にそのベースがあり、初めて、そのＩＣＴでデジタルやＡＩの世界を活用できるところにいくと思う。しかし、報道やペーパーなどで、そのことが上手く伝わっているのかどうかという危惧がある。理解が不十分だと、乳幼児期の大切な部分の意味が弱まってしまうのではないかと考える。

○ 探究的なところってというのはどうだろうか。生活科、総合的な学習の時間、探究が、小学校の教科の中でも中心になり、これからもそうになっていくのか。

○ 基本的には探究的なスタイルで学ぶ。一方、探究という言葉を使い過ぎると、何でも探究となり、探究でないものも探究となってしまうため、そこは要注意だろう。

探究の始まりは乳幼児期にあると捉えているが、なかなか、そのように直接言ってもらえていない。幼児が遊びを見つけ、遊び込み、最後はその遊びが別のものにまたがっていくことが探究そのもの。別物ではなく、そこには主体性がある。小学校以降で、こどもに主体性がないので主体性をどういうふうに育てるのか、表現力がないのでどういうふうに育てるのかとなるが、みんな主体性や表現力を持ってる。意欲満々であり、関心も沢山ある。それなのに、なぜ、ないことになるのだろうか。こどもが言ったり、考えたりしているところをもっと理解してほしい。遊びのもつ大事な価値、意味をもっと広いところで見てほしい。未だに、園で遊んでるだけとか遊ばせてるだけみたいな捉えが残念ながらある。「そうではない」と言わないと、AIの時代になり、人類の未来は危ないと思う。

○ 入園したばかりの3歳児のこどもにも、心が動き、その場所へ行き、手を伸ばそうとする主体性があり、遊びながらさらに心が動き、どんどん面白くなっていく様子がある。そして、安心感があれば、主体性を出すことができる。

昨日のシンポジウムで話題になったように、小学校で主体性を出せていないこともある。卒園した1年生の様子を見せてもらった時に、とても真面目に頑張っていて、園の先生が来ていると分かっても手を振ってはいけないと思ったようで、机の下の辺りで手を振っていた。こどもなりにその環境に望ましい行動をしていたのだろう。30人いれば30通りの心持ちがあるため、先生が探究につなぐことはとても大変だろう。こどもは面白いということについてもっと一緒に話すことができると思う。3歳児の中には、まだ、話しができないこどももいるが、安心し、自分の好きな遊びに夢中になってくると、言葉以外でコミュニケーションを取れるようになり、周りも嬉しい時のしぐさ等が分かり、こども同士で「今、きっとこう思っているよ」というやりとりが生まれている。

今年、国公立幼稚園こども園長会の総会で、大会宣言に3つの資質能力のうち、幼稚園・こども園では「学びに向かう力」、「人間性」が先にくること、これからのこどもに必要なだと表明された。出席者も「各園の実情に応じてこどものことを考えると、やはりそうだ」となった。こどもが我を忘れて遊び、楽しかったと帰っていく生活をつくることが必要であり、その中で、意欲を育み、身近な数、物の性質等が分かり、次第に思考力・判断力、そして、知識・技能に広がっていくのではないかという話になった。園は「こどもってこんなに面白いですよ」ということを伝えていきたいと思う。

そして、その大切さについて保護者にも伝えていきたい。自園の幼稚園では、仕事をしてる人はあまりいないが、こどもに関心をもっている人、向き合うことがしんどいと感じる人、仕事（パート）をしてる時のほうがいいと感じる人と保護者の実態は様々である。こどもって面白いですよ、こんなことしてますよ、そのことが小学校につながっていきますよと伝えていきたい。文部科学省の動画も活用しながら、小さなことから積み重ねていく必要があると思う。

昨日のシンポジウムでは、小学校と幼稚園でポスターセッションを行った。先生の言葉遣い、授業で使うものと園で使うもの、部屋の環境等、日常から連携を積み重ねたことについて提案した。

働き方改革があり、なかなか難しいが、ざっくばらんに話す時間、困っている人がいれば輪を広げていくことも必要だと感じた。文化が違うので、日常の小さなことも突き合わせ、互いを知った上で一緒に話をしていくということも必要だと感じた。

- 継続的な取組になっていくためには、地域がかなり大事となる。地域と小学校のつながりについては、自園がある小学校区では、地域で小学校の位置付けが変わってきた。コミュニティースクール（学校運営協議会）で、私たちで小学校を支えようという雰囲気になってきた。小学校区には、市から運営資金が出され、社会福祉協議会、町内会などの組織を超えて地域主体のまちづくりを推進するＬＭＯ（エルモ）という組織ができ、そこに小学校も地域の一員として入り、一緒にやろうという雰囲気になっている。総合学習、生活科などでも、「何かあれば地域の人を出しますよ」ということが増え、地域と学校の距離が縮まり、連携も深まってきた。その辺をうまく使えば、もっといろいろなことができ、いい方向になると思う。

その前提として、園側にも地域が大切であり、地域は僕たちがつくるのだという感覚がなければ、多分難しいだろう。園周辺も環境であり、そこがよくなかったら保育もよくなるだろう。

- １年を通して小学校とつながり、公開実践などで園の遊びの様子を見てもらっている。また、園が小学校に遊びに行くと、こどもの遊びが膨み、また、そのことを小学校に返していくと、お祭りごっこにつながった取組もある。年々、関わりが深まり、小学校のハードルが下がり、地域の園が小学校にどんどん行きやすくなった。日頃から何でも相談できる関係になると、さらに、こどもを真ん中にして相談できる。先ほどの話のとおり、ＬＭＯ（エルモ）をきっかけに小学校とつながる園もあり、広い視点でつながり合うことが大事だ。

学校の先生、園長が変わると最初からになってしまうことなど難しさを感じているところについて、どう進めていくか、システムをどのように改善していくかが大事なポイントだと思う。

- 取組が進むと、話しやすい、行きやすい、顔見知りになるということでもある。二つ大事なことがある。こどもの発達の段階の違い、異文化など大事にしないといけないところもあるが、異文化の所と一緒に何かをしたり、分かり合ったり、対話したりすることは、平和をつくっていくことにつながる。こどもにとっても、私たちにとっても基本だと思う。

もう一つは、コミュニティとなる。保護者、園、小学校、地域も含めてつながっていくことは、防災教育となる。必ず起こる災害に対してどのように構え、乗り越えていくのかは、コミュニティがあるかどうかにかかる。このような視点からも、取組を大切にし、予算をしっかりと付けてもらえるといい。

- 地域の小学校ではコミュニティースクール（学校運営協議会）で、学校経営方針の提案があり、地域としてもどのような小学校にしていきたいのかを決めようという取組をしている。来年４月に向けて、学校運営ビジョン（仮称）で基本的な考え方を決め、「その内容がない学校経営計画には賛同しませんよ」としようとしている。現在、こどもにアンケートをとり、次に、先生にアンケートを取る。そして、「このように学校を運営します」と地域にも出していこうとしている。コミュニティースクールをうまく使えば、このようなこともできると取り組んでいる。

- このような例は、もっと聞きたいし、新しいと感じる。コミュニティースクールは手探りのところもあるため、参考になるだろう。

- 小学校でも主体的な学びをととても大事に取り組んでいる。園の行事を見せてもらっ

た際に、こどもの意見を取り入れ、プログラムを考え、活動がされている。それが小学校の活動につながっていると感じる。

架け橋プログラムで主体的な学びを考える際には、発達段階は違うが、園でこういう経験をしていたので、小学校ではここまでできる、もう一歩いこうというような連携が必要だと感じる。

- 園の預かり保育の場面となる。3歳児同士が「ブランコを代わってくれない」と揉めていた。その様子を見た5歳児は、「10数えたら、替わってあげて」と3歳児に伝えた。それから、順番を待っていた3歳児は10数えたが、ブランコに乗っていた3歳児は替わらなかった。「10数えても替わってくれん」と待っている3歳児が訴えると、5歳児は、「15にしたらいんじゃない」と提案した。そして、15数えると、すんなりと替わってくれた。そのやりとりを見た後、5歳児に「なぜ、10から15にしたの」と尋ねると、「僕も、10で替わってと言われたけど、替わりたくなかったことがあった。10より長かったらいいかなと思ひ、きっと替わってあげるだろうと思って言った」と話していた。このように、こどもは、育ち、大きくなっているが、小学校に上がると、このようなことも一からみたいなところがある。園で育った姿があるからゼロじゃないということが小学校に浸透するとよい。

プログラムの目指す方向性についてとなる。卒園児が1年生で不登校になった。就学前には、小学校と情報共有もしていたし、まさかと思った。小学校とは、いろいろ話し、校長先生が「やはり居場所をつくってあげなければ」と居場所をつくってくれたり、サポートの先生をクラスに入れてくれたりしてくれ、こどもは、少しずつ学校に行けるようになった。「発表会に出るようになったので、ぜひ来てください」と声をかけてもらった際には嬉しく、様子を見に行くと、そのこどもが手を振ってくれ、涙が出るほど嬉しかった。自分の居場所ができ、学校が楽しいと思え、今があるのだなと感じた。

プログラムの目指す方向性はそれしかない。学校が楽しく、行きたくてしょうがないということが、みんなの幸せにつながる。難しいことを考えるのではなく、こどもの喜び、嬉しさ、行きたいという気持ちを育めるような環境をつくっていくことが私たちの仕事だと改めて感じた。持続可能とは、小学校とよい関係ができ、そういうことが広がること、難しく考えないということだと思う。少しずつできることをし、園と小学校の距離が縮まり、こどもにとっても、親にとっても、先生にとっても、よい関係ができることが1番よい方向だと思う。

- こどもの楽しさや喜びは、私たちの喜びと重なってくる。やらなければいけないからではなく、そういうところを見据え、共有しながら進む取組になるとよい。

- 架け橋プログラムについては、議論が尽きないと思う。広島市の市政の重要課題として、地域コミュニティの活性化があり、御意見のとおり、LMO（エルモ）の活用も大事だろう。人が代わると体制や考え方が変わるということについて以前も議論された。地域を巻き込めば、人が代わっても持続可能な取組につながるだろう。地域の活性化の観点も踏まえて、架け橋プログラムも考えていければよいと感じた。（幼保企画課 幼保連携推進担当課長）

- 広島市が目指すこども像の話は確かにそう。こういうこどもにしますと書いてあるが、もう少し具体的に「就学前のこどもはこういうふうにする」と何か出せないだろうか。例えば、教育大綱にある「平和を希求する心」について、就学前はこんなことしていきますよと、もう少し具体的にできるようにつくっていけるとよい。幼保小の連携にも関わるが、学校側からは、「個々の園で全然違うことをしているため、一緒にはなかな

か難しい」という話もある。広島市としてももう少し具体的なものをみんなでつくれば、「広島市がこどもをこうしていくんだよね」となり、学校もそのように進めていける。是非、検討してほしい。

- 私立幼稚園も含め、どう生き残るかという話になっていく。その地域で園や学校が核となり、地域をどうつくっていくのかを視野に入れたほうがよい。過疎地は、こどもがいなければ、おじいちゃんおばあちゃんだけになり、5年、10年後にはその町は消滅するという危機感を持っている。地域で赤ちゃんが生まれ、その地域でこどもが育っていくことを、園も学校も大事に考え、これから丁寧にやっていかなければと思う。LMO（エルモ）のように、人が集まり、地域の元気な場所で、こどもが育ち、子育てしやすい場所をどうつくっていくのか、乳幼児に関わる関係者、園や学校がそういう役割だという方向で考えていく必要があると、改めて思った。このようなことを共通理解して会議を終われるとよい。